

## すぎさわ 杉沢C遺跡

遺跡番号	461-145
調査回数	第1次
所在地	山形県飽海郡遊佐町杉沢字北ノ前地内
北緯・東経	39度0分39秒・139度57分58秒
調査委託者	山形県観光文化スポーツ部文化振興・文化財課 庄内総合支庁産業経済部農村整備課
起因事業	農地整備事業（経営体育成型）杉沢前田地区
調査面積	2,400㎡
受託期間	令和2年6月1日～令和3年3月31日
現地調査	令和2年8月18日～11月25日
調査担当者	小林圭一（現場責任者）・水戸部秀樹
調査協力	遊佐町教育委員会・月光川土地改良区・山形県庄内教育事務所
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代、中世、近世
遺構	溝跡・土坑・柱穴・河川跡
遺物	縄文土器・石製品・陶磁器・木製品・金属製品（文化財認定箱数：18箱）



遺跡位置図（S = 1:50,000）

### 調査の概要

杉沢C遺跡は山形県の北西端に当たる遊佐町杉沢地区に位置する縄文時代と中・近世の複合遺跡である。鳥海山南麓の小盆地を西流する月光川支流の熊野川の左岸に立地しており、1953（昭和28）年に石囲いの中から横臥した状態で、完形の土偶が発見されたことで有名な杉沢A遺跡からは、600mほど東に離れている。また対岸には1978（昭和53）年に国の重要無形文化財に指定された番楽（山伏によって舞われる神楽）の「杉沢比山」の舞台となる熊野神社が位置している。

調査区は熊野川南岸に沿っており、全体が旧河道跡上に営まれていた。河道が埋没する過程において、縄文時代以降の活動の痕跡が確認され、縄文時代中期中葉大木8a式、後期後葉金剛寺1式（瘤付土器第Ⅱ段階）、晩期後半大洞C2～A1式の土器がまとまって出土した。中期の土器は調査区南側の黒色土、後期の土器はその北側の褐色土、晩期の土器は調査区西側の熊野川に近い褐色土から出土しており、年代が下るに従って川に近づく傾向が看取される。特に晩期は杉沢A遺跡の土偶の時期（大洞C2新式）に相当しており、同遺跡との関連性が想起される。縄文時代では石鏃等の石器類が極めて少なく、磨製石斧と磨石等が出土したのみで、晩期の土器は装飾の乏しい半精製や粗製土器が大半を占めている。川辺の作業場としての遺跡の性格が推定される。

近世では建物の柱穴と思われるピットが多数検出された。多くに柱痕跡が見られ、辛うじて残存した木材の年代を測定したところ、江戸時代前期頃の測定値（320～350年前）が得られている。調査区域に鳥海山で修行する山伏の宿坊があったことを示す絵図が残されており、それを裏付ける成果を得ることができた。また巨石を多く含む河道跡を掘り込んで近世の井戸が構築され

ていた。木組みの井戸で、中からは箸や曲げ物などの木製品が多数出土し、江戸時代後期頃（180年前）の年代値が得られており、宿坊で利用された井戸であったと考えられる。調査区の北西側では、水路と見られる溝跡が検出されたが、その覆土から近世の陶磁器類の他に、中世の珠洲焼や青磁の破片が出土した。当地での修験道の開始が、中世に遡る可能性を示している。

### まとめ

杉沢C遺跡の発掘調査では、鳥海山麓の豊かな自然環

境の中で、縄文時代中期から晩期にかけて、生活が営まれていた様相が確認できた。鳥海山麓の恵まれた資源を十分に利用して、川辺での作業を執り行っていたのであろう。

中・近世では、鳥海修験の拠点として当地が機能しており、今回の発掘調査で宿坊の痕跡と推定される柱穴群を検出した。また井戸跡からは多数の木製品が出土し、修験道の生活の一端を明らかにすることができた。



写真1 調査区から鳥海山を望む



写真2 調査区南側全景



写真3 調査区西側石組遺構（SM358）検出状況



写真4 調査区西側石組遺構（SM358）上石除去状況



写真5 調査区西側縄文時代晩期土器出土状況



写真6 調査区南側井戸跡（SK406）断面の3D写真



写真7 杉沢C遺跡調査区全体写真（北：左側）

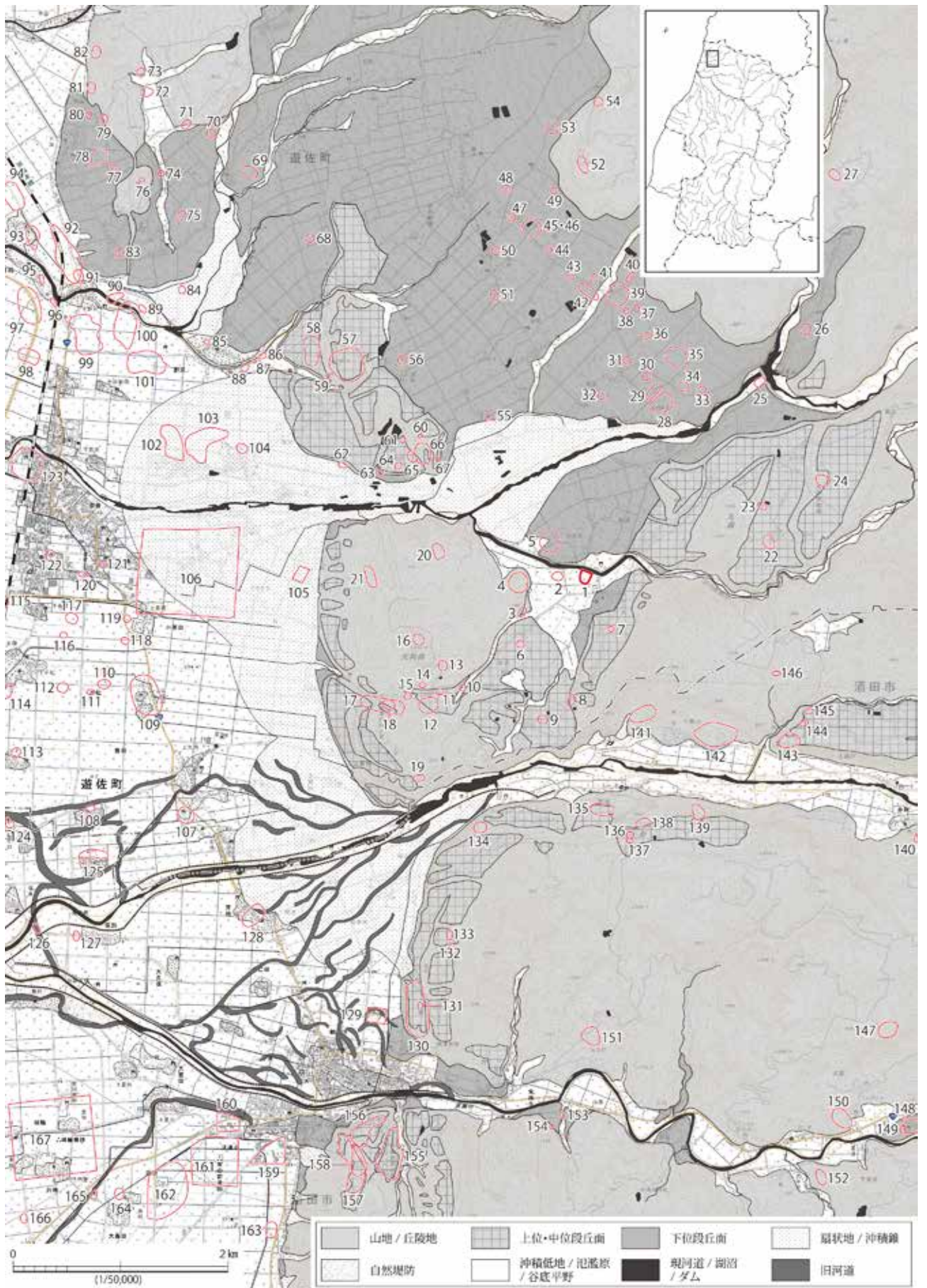


図1 杉沢C遺跡周辺の遺跡と地形分類図（1：杉沢C遺跡）